

## 開学第70周年記念式典学長式辞

日頃は学校運営にご尽力いただき、ありがとうございます。

本日は、第70回という記念すべき開学記念式典です。

本来ですと、学生をまじえて、この日をお祝いすべきですが、コロナ禍のため果たせません。また例年アーティストや、各界の著名人をお招きして、記念講演やコンサートを行ってきましたが、それもできません。

しかし理由の如何に依らず、今日は、来賓とみなさまと、普段学生と触れあっていただいているみなさまと、いわばこの学校の身内だけで開学第70周年記念式を挙行できることは、本学の原点を確認するチャンスだととらえています。

本日は、京都西山学園理事長櫻井悦夫氏、ならびに光明寺法主、西山浄土宗管長堀本賢順猊下にご臨席たまわり、第70回開学記念式典を挙行致します。

さて、本学は弘安3年（1280）「学寮」の記録があるといえますから、鎌倉時代から続いている、由緒ある学校です。740年の歴史は、平坦なものではなかったと思います。おそらく血のにじむような先人たちの不断の努力によるものと考えております。この学校は、西山上人の流れを汲む、お念仏の教えを伝える学校です。西山上人のご生涯を見ていると、非常に明晰でまっすぐなひとというふうに感じられますが、その歩まれた道筋は、決して平坦なものだったわけではありません。

建永元年1206年12月、事件は起こりました。後鳥羽上皇が熊野参詣の留守中に、住蓮（じゅうれん）、安楽房遵西（あんらくぼうじゅんさい）という法然上人のお弟子の別時念仏・六時礼讃を聴聞した女房が、感激のあまりに出家したといえます。このことが上皇の知るところとなり逆鱗に触れて、住蓮、安楽は死罪。その後、専修念仏停止（ちょうじ）の動きは広がり、2月9日には一向専修の輩がとらえられ、同28日には法然は土佐国、親鸞は越後国に配流との宣旨が下されました。法然上人は3月16日に九条兼実の好意で法勝寺を出発し、経の島・室の泊りを経て、その後変更された讃岐の国に配流されました。

このとき30歳だった西山上人は慈円和尚の申し預かりとなり、無動寺に蟄居を命ぜられます。目の前で同門の者たちが処刑にあう。法論を闘わせ、教えを授けた者たちが迫害されとらえられる。そんな現実を目の当たりにしながら、晩年の法然上人をバックアップし、混乱する在京の念仏信者たちをささえ指導するという立場におられました。

さて、この学校は、学寮以来、大正5年専門学校令により3年制の西山専門学校となり、また昭和25年の仏教学科を有する2年制の短期大学となり現在に至っています。戦後の復興から立ち上がっていく時代の要請を受けて、この学校も生まれ変わりました。平成10年以降、学生の確保に苦勞し、経営の危機に直面しました。

この歴史は西山上人の人生そのものです。どんなに大変な状況に合っても、めげず、あきらめず、いま何をやるべきかを考え、教職員、学生、同窓生が心をつにして行動し、教育を一度も中断させず、教育の明かりをともし続けてきました。近年では留学生を確保して、その教育で定評を得たから危機が乗り越えられてきたのです。西山上人がどんなことがあっても、決してお念仏のとしびを消さなかったから、浄土宗の今日があるといいでしょう。

本学は、別科、仏教コース、国際経営コース、みらい創造コース、保育幼児教育コースの充実が使命です。しかし、西山上人の大学であるという精神は揺らいでいません。その根本は「慈悲の心を学ぶ」ということで貫かれています。国際人の育成も、自分の未来開拓も、保育幼児教育の広がりも、仏の慈悲を学ぶという精神を中心にしたものでなければならないのです。

では「学仏大悲心」とはなんでしょうか？

さきほど読誦していただいた「道俗の時衆等」ではじまる善導大師の「十四行（じゅうしこう）の偈」。その中頃に出てきます。

「仏の大悲心を学んで 長時（ちょうじ）無退（むたい）のひとに帰命したてまつる」とあります。

仏の大きな慈悲の心を学んで、長い間、忍耐強く修行し続けるひと、つまり法蔵菩薩=阿弥陀如来に帰命したてまつるといっています。

では「帰命」とはという言う意味なのか。私たちのいのちを仏のみまえになげうってささげるという解釈や、命とは、いのちのことでなく、命令、勅命の命。つまり阿弥陀仏の教えのことだという解釈もなされています。西山上人は、命は、私のいのちでなくて、阿弥陀如来のいのち。今私はほとけさまのいのちを生きている。人生とはそのことに気付くプロセスなんだという意味のことを仰っています。

学生の学びを、どんなことがあっても辛抱強く、忍耐強く支え続けていくことが、私たちの使命だと考えています。どうかお力添えをお願いいたします。